

岐阜女短大 ○道家 三季
大竹 節子

1. 被服における一つの重要なポストをになう被服工作は、その工作の過程において構成的な分野を持ちながら、その作品は感覚上にデザインの、体形的効果を有する。「被服構成および実習」を担当する指導者としては構成的な分野における技術が学習上、その実習が衣生活の発展を目的とするものであり、学生の実習として、その将来に創造性を期待するためには、身体と被服の関連性などを原理的、理論的に把握し、デザインに展開のできるような指導であらねばならないと考える。

今回は、被服構成に関する教材研究として、着用者の体形に対する構成上に多くのシステムがある。それらのウエスト原型を身体と製図の関連性をいかに考えるかについて本研究を進めた。

2・3. 主な4システムの原型をとりあげて、これらを比較しながら平面的な原型が固定される状態を考察した。なお、身体はダーツの結集と考え、そのダーツが原型の中にどのように処理されているかをも併せ考察を行なった。その結果として身体の測面上の曲線によるダーツは衿ぐりの衿みつに関係があると考えられた。N.P.よりS.P.までのダーツ量は前後肩幅の差にあるように思われる。また、S.P.より身幅(前胸幅、後背幅を指す)までのダーツ量は、後は肩胛骨の高さにより定まるものであり、前はブレストより斜脇にいくぶんの量が見られたが、これは原型の中には処理されていないことが判明した。ゆえにこれらは補正により処理することが肝要と考えられる。